



TITLE:

<図書紹介>メート・ラタナプラシット, 『北タイ方言辞典』,  
Bangkok, 1965,xiv+378pp

AUTHOR(S):

桂, 満希郎

---

CITATION:

桂, 満希郎. <図書紹介>メート・ラタナプラシット, 『北タイ方言辞典』  
, Bangkok, 1965,xiv+378pp. 東南アジア研究 1968, 6(2): 465-466

ISSUE DATE:

1968-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55502>

RIGHT:

記録発掘の努力がつづけられてきたのであった。ここに紹介しようとする2冊の書物は、「歴史・文化・考古学文献出版委員会」がこれまで断片的に発表されていたアユタヤ史料を総まとめにしようとする最初の試みとして評価したい。

『アユタヤ時代古記録集成・第1冊』には、長短とりまぜて34点の史料が収録されている。ここに「古記録」と訳したのはタイ語‘chotmaihet’である。この語の原義は「記録されたもの」の意であって、かなり広い外延をもつ語である。本書は目次も備わっておらず、編集上の不手際が目立つが、いちおう内容別に、外交・通商、宗教、行政、著作(kantaeng nangsu)の四つに分類され、それぞれについての史料が年代順に配列されている。時代的には1416年のパーリ語文書を最古層とし、1756年のタイ語銘文を最新層とする。史料の外部形式についてみると折本のもものが8点、貴族および僧侶の昇叙を施した金銀牌(lan thong-lan ngoen)が6点、寺院の門扉、パゴダの基底部、神像の台座などから収録した銘文が9点、その他11点となっている。

長文のものからあげると、まず「アユタヤ年代略記本」(1680)がある。これは俗にLuang Prasoet本と呼ばれるもので、すでに何度か上梓されているが、本書にはその原本の一部がはじめて写真版で示された。侍従職、警護職、宮内府など四つの役職の「心得書」(tamra)は、アユタヤ時代の中央行政機構を知る上に重要な文献であろう。また「ベットラーチャー王の八つの問」(1690)は、一種の教理問答であって、タイ人の仏教理解の一面を知り得て興味深い。ナライ王治下のアユタヤへ、ルイ14世の派遣したフランス使節ラ・ルベールにより締結された「暹仏協定」タイ語テキストと、2通の関係書簡、および1621年、テナセリムの地方役人がデンマークの商人に与えたものと考えられる交易許可証原文は、当時の対外交渉史料として重要である。各種の銘文のうちとりわけ興味があるのは、本書の冒頭に収められたルーイ県ダンサイ郡在のパゴダから収録された銘文で、1560年の日付をもち、アユタヤ王国と、チェンマイ王国との境界線画定の儀式執行に際し録されたものである。

本書に収録された史料は、いずれも原綴字に従っているが、このことは、本書が単に歴史学者にとっ

て重要な史料であるにとどまらず、言語史家にとっても、スコータイ碑文と三印法典(1805)の空隙を埋める資料として貴重なものとしている。

2冊目の「アユタヤ時代寺領・寺院奴隷寄進文集成」は、かつてタイ国芸術局紀要*Warasan Sinlapakon*に分載紹介されたものであるが、今回まとまった形で出版され、利用が便利になったことを喜ぶたい。文書の年代はユーカトッサロット王(1605~1610)およびブラベットラーチャー王(1688~1703)の治世と推定されている。寄進の対象となった寺院は、いずれも南タイ、パタルン県所在の寺院である。これまでほとんど手がけられていなかった寺領、寺院奴隷研究の一次史料としてきわめて重要な意義をもつものと言えよう。(石井 米雄)

メート・ラタナプラシット『北タイ方言辞典』Bangkok, 1965. xiv+378 pp.

นายเมธ รัตนประสิทธิ์ พจนานุกรมไทยวน-ไทย-อังกฤษ

タイ語北部方言(N.T.)の辞書・入門書の類は今までもかなり出版されているが、また一つ本書が加えられたわけである。全体は「導入」、「本文」、「中部タイ語(C.T.)単語の索引」、「植物名」および「C.T.の植物名索引」より成り、見出し語の数はだいたい4505であるが、その中には複合語、句、節なども含まれているから、実際には約3000語を有する辞書と見てよかろう。C.T.による索引が加えられているため、使用するのに非常に便利なものとなっている。また、英語の訳語は参考のために付せられた程度のもので、C.T.と同列には扱われていないが、意味の理解を確かなものとしてくれる。本書も、タイ人の手になる他の書物と同様、N.T.をC.T.文字により表記しているのであるが、その際、N.T.の音素体系を忠実に表わすためにどのような手段が用いられているかという点が問題となる。N.T.文字による表記はC.T.のそれと規則的に対応するので、大して問題はないのであるが、主だったものを次にあげてみる。

1) C.T.は5声調、N.T.は6声調を有する。N.T.における開音節あるいは閉鎖音以外の子音を末尾子音に有する音節における高平型、および閉鎖

音を末尾子音に有する短い音節における高昇型、この二つの声調類は C.T. 文字そのままでは表わすことができないため、本書ではこれら 2 者を「sǎŋ-thúm」と称し、それらを有する音節に下線をほどこすことにより表わしている。

2) N.T. における /n/ は C.T. にはないが、これは、/ñ/ を <ɲ/ として、/j/ を <ɟ/ として表わし分けており、問題とはならない。

3) C.T. では /w/ を伴う子音結合は /kw, khw/ しかないが N.T. ではその他の子音と /w/ との結合が存在する。本書では子音結合を <Cw-> で表わし、結合せずに 2 音節になるものを <CVw-> で表わしている。例えば、/swaam/ と /sawád/ などである。

これらの点を理解しておけば、本書の C.T. 文字による表記から音素表記に変えることは問題がないであろう。他の辞典の多くにおいては、子音、母音の相異に関する説明はなされているが、声調類についての正確な説明を欠いている。この点で本書は他の書よりも詳細だと言えよう。本書における N.T. は、子音、母音および声調類の組織から見て、チェンマイの方言、あるいはそれに最も近い方言と認められる。また集められた語彙の中には、現在では C.T. の語彙に取って代わられて、かなりの年寄りで田舎に住んでいる人でなければ覚えていないような語彙が多く含まれている。(桂 満希郎)

Sylvia J. Lombard (compiled) and Herbert Purnell (edited). *Yao-English Dictionary*. Linguistics Series II, Data Paper No. 69, Southeast Asia Program, Department of Asian Studies, Cornell University, Ithaca, 1968. 363+xiv pp.

ヤオ語に限らず東南アジアの少数民族の言語に関する資料というのは非常にとぼしいのであるが、近年各国の研究者による調査が盛んになり、その結果報告が出始めてきた。本書もそれらの一つとして非常に意義深いものと言えよう。著者は主として北部タイにおいて、1952年より1962年にわたってヤオ族と接触を保ち、その時に収集した言語資料の一部を整理し、辞書としたのが本書である。今までに行な

われたヤオ語の研究報告は極めて少なく、辞書としては、本書が F.M. Savina, "Dictionnaire Frafais-Man," BEFEO 26:1-225, 1926 につぐ第2冊目である。Savina が主として北ベトナムにおける Kim-di ヤオ語を扱っているのに対し、本書はタイ国北部、ラオスに分布する Lu Mien ヤオ語を対象としており、見出し語だけで3234語、その他をも含めて合計すると11,000語(句)を有する。この種の言語に関するパイオニア的報告としてはかなり大きなものになっている。Lu Mien ヤオ語と言うのは Savina の Kim-di ヤオ語よりも、G.B. Downer, "Phonology of the Word in Highland Yao," BSOAS 24: 531-541, 1961 における Tai-pan ヤオ語により近いものである。

本書における表記法は、宣教師 E. J. C. Cox により考案され、1954年ごろから北部タイ国で用いられてきたローマ字表記であり、Savina, Downer の仕事により知ることのできるベトナム語のローマ字表記に改良を加えたものとはかなり違っている。純粋な音素表記ではないが、非常に高度に言語の音素体系を反映していることは、本書に付せられた音素体系との対照表を見てもわかる。しかし、あまりにもタイプライター使用上の便宜とか、その他の実用的な便利さを重視したためか、例えば、/ŋ/ を <v> で表記するなど、通常の音素記号に対する概念からかけ離れた表記が多いため、本書を自由に使いこなすためには、この表記法にかなりよく慣れる必要があるだろう。声調は音節の直後に付せられた文字により表わされている。この辞書の表記方法にもとづいて、音素体系を考えること、あるいはここに集められた資料を音素表記にもどして、それぞれの目的に応じて使用することは出来るのであるが、ただ声調類の変化に関する説明が少なすぎ、Suprasegmental phonemes についての説明がないために、この辞書のみから言語構造を完全に知ることができないのは残念である。例文は豊富であり、著者のヤオ語に関する深い知識と能力とを示している。なお、本書は本文の他に、Appendix A—E が加えられており、それぞれ、数詞、親族語彙、命名法、諺および慣用句、類別詞に関して有用な説明が成されている。研究のため、また実目的のためにも、役に立つ資料と言えよう。(桂 満希郎)